

GCOE-SRC 冬期シンポジウム「世界のボーダースタディーズとの邂逅」

グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」主催による初めてのシンポジウムが 12 月 19 日（土）にスラブ研究センター 4 階大会議室で開かれた。当日は、例年より遅れ気味ながらようやく降り積もった雪の中を、会場に用意された座席がほぼすべて埋まるほど大勢の人が集まった。

林副学長による開会の辞に続いて、まず岩下センター長が今回のシンポジウムの趣旨を説明するとともに、GCOE プログラムによる活動の概要と今後の展望について報告した。その中で、当プログラムが従来のアカデミックな領域を超えて、国内・国外の政府や第三セクターと連携しながら国境問題に貢献するものであるとともに、**ABS** (Association for Borderlands Studies) や **IBRU** (International Boundaries Research Unit)、**BRIT** (Border Regions in Transition Conferences) 等、ボーダースタディーズの拠点となる機関や組織と協力しつつ、これまであまり扱われてこなかった東アジアやその他のユーラシア地域を重点的にカバーすることによって、この分野で新たなポジションを築くための野心的な試みであることが示された。



左)趣旨説明を行う岩下センター長

右)奥から、リカネン、ブリュネジャイ、プラット各氏

続いて、現在のボーダースタディーズをリードする三人の代表者を壇上に招いて、当該研究における現下の潮流について議論するラウンドテーブルが開かれた。まず **ABS** を代表してエマニュエル・ブリュネジャイ (Emmanuel Brunet-Jailly) 氏が、近年のボーダースタディーズの動向を報告した。彼はこの研究分野における主要な切り口を、国家政府、地方権力、文化、経済の 4 つのテーマに整理したのち、自らが編集責任を負う **Journal of Borderland Studies** 誌に最近掲載された諸論文の傾向を様々な角度から分析した。それにより、研究論文はなお北米地域の政治・経済を主題としたものが中心であるものの、扱われる地域やトピックは年々多様化していることが指摘された。次に報告した **IBRU** 主任のマーチン・プラット (Martin Pratt) 氏は、主に国境の画定と管理に関する実務的な方面から、今日におけるボーダースタディーズの課題をあげて説明した。その中では、地球温暖化に伴う海面上昇によって水没の危機にさらされている島嶼地をはじめとして、気候変動

による様々な障害が生じている地域で国境線の管理に困難をきたしているといった、深刻な問題が出された。さらにヨエンスー大学（フィンランド）のイルッカ・リカネン（Ilkka Liikane）氏は、1995年のベルリン大会を皮切りにこれまで世界各地で開催されてきた国際会議 **BRIT** について、その各大会の特色を年代順に振り返った。それによって、冷戦構造の終焉やグローバル化の中で国境の持つ意味合いに生じてきた様々な変化が、**BRIT** の国際会議にも明確に反映されていることが明らかにされた。欧米のボーダースタディーズの最先端における動向を捉えたこれらの報告に続いて、岩下センター長が簡単に中露国境の現況についてレポートし、欧米の研究ではこの地域周辺の国境問題が持つ重要性について十分認識されていないことを訴えた上で、質疑応答に入った。会場からは、国家の勢力的なレベルの違いが国境問題との間にどのような関わりを持つか、ボーダースタディーズと地域研究は相互にどのような関係にあるべきか、また、サイバースペースのようなバーチャルな空間の事象に対してボーダースタディーズはどのような貢献ができるかといった多岐にわたる質問が出され、当研究分野に対する一般の関心の高さを伺わせた。

会場に用意されたサンドイッチの昼食をとりながら開かれたランチオン・セミナーでは、ウォータールー大学（カナダ）の原貴美恵氏が、北方領土の問題についてレクチャーを行った。そこでは、北方領土の問題が東アジア地域の歴史的な冷戦構造の中で、竹島や台湾、朝鮮半島をも含む他の領土問題と相互に関連しながら発展してきた経緯を踏まえ、多国間の枠組みで問題解決を図ることの重要性が指摘された。さらにその解決策を講じる上では、北欧のフィンランドとスウェーデンの間で結ばれたオーランド諸島の管轄をめぐる協定が、和解交渉の具体的なモデルになり得るとして提案された。

引き続き行われた午後の部では、ダブリン大学トリニティ・カレッジのトマシュ・カムセーラ（Tomasz Kamusella）氏が、ポーランド、チェコ、スロヴァキアおよびドイツの言語文化圏の境界に位置するシレジア地方の言語状況について、歴史・社会言語学の観点から報告を行った。伝統的には「ポーランド語の方言」、「チェコ語の方言」さらにはスラブとは系統を異にする「ドイツ語の方言」と扱われてきたシレジアの人々の言葉は、実際にはクレオール的存在であることを指摘し、この地域の言語区分、そして人々のアイデンティティがいかに国境の変遷と直接的に関連してきたかを論じた。ポーランド側の話が中心になったカムセーラ報告に対し、コメンテーターの橋本聡氏（北海道大学）は、チェコ側の視点から論じ、また会場からはフィンランドとロシア、ウクライナとスロヴァキアなど他地域の諸問題が提示されるなど、「言語と境界」というテーマの普遍性と重要性が改めて確認された。



左) カムセラ氏



右)岡野氏

休憩をはさんで、外務省国際法課長の岡野正敬氏が国境問題にいかに対応するかについて、実務者の立場から講演を行った。その中で岡野氏は、国境問題の解決に向けた方策として、領土の有効性や法的一貫性の他に、市民による行動も法的な意義を持ちうることを指摘した。そして最終的には、当事者間の交渉の場を維持しながら相互信頼を醸成し、国際法に基づいて解決を図ることの重要性を強調した。

全体的に見て、今回のシンポジウムは従来のものに比べてかなり小規模であったが、開催の趣旨が明確であっただけに、その成果は充実したものに感じられた。このシンポジウムにおける「邂逅」から得られたものを、さらにどのように発展させていくかが、今後の課題となる。

(スラブ研究センター野町・後藤)